

十八世紀ブランデンブルク・プロイセン 繊維工業の生産構造について

浅 沼 由 和

はじめに

- 1 問屋制支配の実態
- 2 問屋制度の再評価
- 3 問屋制資本家による労働力の組織形態
むすび

はじめに

本稿ではプロイセン抬頭の経済的・社会的起動力分析の第一歩として、十八世紀ブランデンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造を検討してゆきたい。まずドイツ・マニユファクチャ研究について、課題として残されている部分を明らかにすることからはじめたい。

ドイツ・マニユファクチャ理解の基準を示している松田

十八世紀ブランデンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造（浅沼）

智雄氏は、工場生産者類型 *Fabrikantentypen* を提起することにより、ドイツ資本主義形成の基礎過程を展開している⁽¹⁾。それは第一に問屋制的生産者、第二に技術者の生産者という二つの資本類型として設定している。資本発生の系譜から、前者は問屋制機能を基軸としその補充的部分に協業に基づく生産を有する工場生産者であり、東エルベにおいて支配的であつたとする。また後者は、小都市的・農村的であり「農民プラス近代職場主」の定型を実現するものとし、西エルベにおいて支配的であつたとされる。この資本発生類型の相違に応じて、東エルベⅡ農業国・西エルベⅡ工業国という異質的な両地域が提起される。いいかえると生産者類型の質的な差が、ドイツ社会の発展過程において、西エルベはつねに上昇の側面を担い、東エルベは阻止的な側面を担うという规定的条件を生み出すと説かれるのである（松田智雄⁽²⁾）。このような理解の背後には、技術者

的生産者が問屋制的生産者の支配を排除するという「対立」関係の理解があり、結果的には東エルベ地域の工業力総体を低く評価することとなる。これはプロイセン抬頭の起動力を規定する場合、国民的な経済力の上昇を一義的に農業問題の分析で解釈しようとする姿勢と決して無縁ではない。

以上の生産者類型論が、東エルベの工業的起動力を充分に評価しきれない理由として、類型論の基軸としての *Manufaktur* 理解に問題が内在していると思われる。従来 *Manufaktur* は一九世紀初頭の事実に基づいて立論されており、松田智雄氏に従うと「マニユファクチャ労働者は、同一作業場で同種類の商品を、同一の資本家の指揮下で生産しなければならぬ」とし、マニユファクチャ工場制手工業というわが国で一般的見解を示している。⁽³⁾ この理解は、*Fabrikant* を「工場生産者」と理解してゆくことと重なってくるのである。このため小商品生産段階からマニユファクチャへとというウクライド発展の問題は、「農耕的国民」より「工業的国民」へ、ないし「萌芽的」状態から一挙に「工場制度」への移行という飛躍的な論理展開となってくるのである。

このような基本的な理論に対して、従来においても反対の見解が提出されており、われわれはまずこれを検討して

ゆかなければならない。まず第一に問題となるのは、J・クリッシャーが二〇世紀初頭のことであるのにしても、その実証的成果にもとづきながら、歴史学派の影響のもとで「集中マニユファクチャ」(工場制手工業)という規定を「重大な誤謬」(*schwerer Irrtum*)として排除していることである。かれはマニユファクチャを考慮しつつ単純協業―問屋制―機械制大工場という段階的シェーマを提出している。クリッシャーの成果に対して、東独の「分散マニユファクチャ」(*dezentralisierte Manufaktur*) 論では、こうした立論をマニユファクチャ期を否定しざるものとして批判するが、問題なのはクリッシャーの指摘する集中マニユファクチャは、「実際には検出出来ず」「理論的把握」であるという指摘であると思われる。このクリッシャーのテーゼは、マニユファクチャ工場制手工業という理解に基本的な反省を促しているわけであり、これは事実認識の問題として恣意的に無視すべきものではない。第二に H・クリュガー、R・フォオルベルガーら第二次大戦後の東ドイツの歴史家は、一九五〇年代から領邦絶対主義下の繊維工業を分析する中で「分散マニユファクチャ」という概念をとりあげて、そのはたした重大な役割を強調している。「分散マニユファクチャ」の存立条件としては、集中(中心)作業場と分散的労働をあげるのレーニンの「ロ

シアにおける資本主義の発展」からの理解で、この点ソヴィエト史学と同じ線上にある。この東独の分散マニユファクチャ論に対して、わが国でどう対立したかといえ、先に指摘したマニユファクチャ工場制手工業という理解によりながら、分散マニユファクチャ論を松田・大塚久雄氏らの成果と融合させようとし、完全に意味の読み替えをおこなってしまった。例えば大塚隆雄氏は、クリュガーらの「分散マニユファクチャ」論を、大塚氏のいわれる「マニユファクチャと問屋制との絡みあい」と整合させようとしているのである。⁽⁴⁾ クリュガーらは独立のウクライド発展として単純協業―問屋制―分散マニユファクチャという重大な発展段階論を提起しているのであり、「絡み合い」論にみられるマニユファクチャ・問屋制度というちがう資本形態の共存ではなく、同一系列の資本と生産力のあり方を理解しているのである。

すでに提起されていたこの二点の再認識は、マニユファクチャII工場制手工業という理解にもとづき展開される生産者類型論とは鋭い対立をなす。小稿では、この二点の問題をあらかじめ設定された概念からでなく、具体的にブランドンブルク・プロイセンの事実から検討してゆきたい。

註(1) 松田智雄『ドイツ資本主義の基礎研究』五三―六九

十八世紀ブランドンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造(浅沼)

頁。同「ドイツ資本主義構造論に寄せて」川島・松田編『国民経済の諸類型』に所収。

(2) 松田智雄「資本主義への移行―ドイツ」井上・入交編『西洋経済史学入門』に所収、七四―七七頁。

(3) 例えば柳沢治氏は「グーツヘルシャフトの支配的なエルベ河以東の地域では、小商品生産者の両極分解に基づく産業資本の形成は殆んど完全に阻止される」と指摘している。この設定は生産者類型論に対応するものであり、プロイセン・マニユファクチャ研究の欠如と無関係ではない。柳沢治「西南ドイツにおけるマニユファクチュアの形成」『土地制度史学』三一号一七頁。福応健『マニユファクトリア』の展開―ドイツ」井上・入交編、前掲書一〇九頁。

(4) 北条功「いわゆる『プロシア型』の歴史的構造」山田盛太郎編『変革期における地代範疇』に所収。

(5) 松田智雄、前掲書五四頁。

(6) 松田智雄、前掲書二〇一頁。柳沢治、前掲論文一七頁。

(7) J. Kulischer, Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit. II, S.162-163

(8) H. Krüger, Zur Geschichte der Manufakturen und der Manufakturarbeit in Preußen. S.194

(9) 井上幸治「分散マニユファクチャー―ヨーロッパ史学の

「動向」『明治史料』五、一六頁。

- (10) 大島隆雄「ドイツ産業革命の側面」『史料』四六ノ
二、一〇三頁。

一 問屋制支配の実態

ブランドンブルク繊維工業の生産形態を確定する作業として、ロシア商業会社 (Russische Handelskompanie) の経営形態を検討することからはじめたい。

プロイセン・ロシア間の商業関係は、一七世紀中期以来緊密な関係を保つようになり、一八世紀後半にはその商業関係は頂点に達したといわれる⁽¹⁾。このような気運の中、プロイセン当局は一七二五年ロシア軍隊と軍用ラシャ取り引き契約を結んだ。この二五年九月にベルリンの富裕な商人・商會が中心となり、軍用ラシャ製造のためのロシア商業会社を設立している。設立資本は一〇万ターレルであったといわれ、一年後には資本金三〇万ターレルに増大している⁽²⁾。この商業会社は、一七二五年九月二日の設立と同時に特権を獲得し、対ロシア繊維製品輸出の独占、さらには一七三一年以降全輸出総額の四パーセントの輸出奨励金下付を許されることになった。この商業会社の運営は、民主的・連帶的なものであり、重要業務は多数決で決定し、そ

の代表者は一年ごとに交代している⁽³⁾。当初この会社は、自己の作業場を設立しておらず、ロシア軍用ラシャの注文を受ける、繊維生産の作業工程をすべてツンフトに委託し、問屋制支配下に請け負わせていた。この契約の相手は個々の親方ではなく、個々のツンフトであったのが特色で、Zunftverlag とよばれていた。その後、地方ツンフトの染色工に請け負わせた染色についてペテルスブルクから苦情が発せられると、商業会社はドロッセン Drossen、ランズベルク Landsberg に自己経営の染色作業場を設立したが、その他の諸工程はいぜんとして当該作業のツンフトに委ねておいた。かくて問屋制下にツンフトが支配・組織化され、独立的な織布作業はたんに織布という部分労働に専門化していった。ロシア商業会社は、仕上工程を自己の中心作業場で行ない、織布工程などを各ツンフトに委託し、大部分の作業を問屋制支配のもとにおいている。

理論的にいえばこのように中心作業場と問屋制支配との結合は、むしろ一八世紀の正常な手工業生産形態ではなかろうか。これをどのように整合的に理解するかが本稿の課題であるが、さらに具体的に当時 Fabrique といわれるものを二、三分析しておきたい。

一七六六年二月一日にマゲデブルク議會上に提出された、薄布製造を行っているディジンク・ウント・ハッゼ工場

(Diesing u. Haase Fabric, Manufaktur Diesing u.

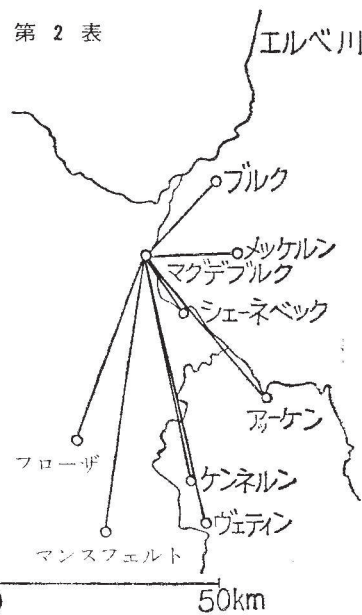
Haase) の経営報告書を分析した。この報告書は、ディジンク・ウント・ハッゼ工場内の労働力の構成とその二三種に及ぶ分業の実態を報告している。第一表はこの労働力構成をその作業工程に分類し、その労働者数を整理示したものである。(ここでは、梳毛・撚糸等を準備工程に入れることにする。また不明確な名詞は固有名詞と考え、その職種は紡糸工として算出しておいた。)

このディジンク工場の経営的規模をその経営形態に即して検討すると、自家作業場に準備・仕上工程の相当部分が集中化されており、紡糸・製織工程は作業場外労働を問屋制下に委託するという二つの作業構成部分からなりたっている。この経営において、自家作業場の準備・仕上作業工程内には一三〇名の労働者がおり、作業親方 Wirtk Meisterのもとに協業的分業が成立しているからこれを本来的な集中マニファクチュアと規定することができる。梳毛・紡糸作業工程は、第二表の示すごとく作業場外のマゲデブルク周辺の分散化した各村を問屋制下の生産工程に結合させ、生産の有機結合の組織性をますために作業場周辺地域や村の中に紡糸用の小規模作業場を形成している。部分労働にみられる梳毛配布係は、ディジンク工場の生産工程に占める問屋制の重要な役割を表現しているものといえる。さ

第1表 ディジンク・ウント・ハッゼ工場の労働力構成とその分業実態

I 準備工程				III 製織工程				IV 仕上工程			
人員構成				織機台数				人員構成			
男 婦人 子供				4台の(山羊・羊)厚手織物織機				作業親方 (3) (3) (5)			
洗毛工 (4) — —				3台のニーム・ローマサー				縮絨工 — — 7			
選毛工 (6) — —				8台の Camélgarne u. Wollen Plüsch auch Velpe				染色工 (4) — —			
梳毛工 (2) — 36				14台の半絹混合織機				捺染工 (1) (1) (2)			
梳綿工 — — 7				2台のクレボン(半絹)織機				漂白工 — — (3)			
麻工 — — (20)				3台の縞模様混合織機				重附立工 (4) — —			
糸巻工 — — (12)				10台の Grepde dame				乾工 (1) (1) (2) (1)			
撚糸工 — — (4)				2台のイギリス・サージ織機				乾燥工 (2) — —			
整糸工 — — (8)				93台の縞模様半本綿織機				染色工 (3) — —			
練絨工 — — (6)				10台のサージ織機							
練絨工 — — (20)				149台の織機							
II 紡糸工程				この149台の織機は							
紡糸親方 2 2 1				[94名の親方 (Meister)							
紡糸工 21 25 631				101名の婦人・未亡人							
梳毛紡糸工 — — 218				189名の子供・Gesinde							
梳毛配布係 1 1 —				により動かされている。							

() 内は自家作業場内労働者数



第 2 表

らに経営主は、その製織工程をも自家作業場外に、小生産者 (Meister) の織機を支配し、問屋制下に作業を分配している。このようにしてディンク工場は、自家作業場と問屋制支配という二つの製造部分で全体として一つの生産工程を組織化しているといえる。

このような経営形態は、またマグデブルクのゲブリュダー・シュヴァルツ (Gebrüder Schwarz) の経営するリボン製造工場においても検出出来る。一七七二年四月二五日マグデブルク議会で軍事顧問クレヴェノウ (Klevenow) の「ゲブリュダー・シュヴァルツ・リボン・マニファクチャの状態」(Der Zustand der Bandmanufaktur der Gebr. Schwarz) 報告書を検討してみよう。(a)

「工場の作業状態を調査してみると、四三台の回転しているリボン織機 Band Stuhl のうち、三三台の織機は工場 Fabrique-Haus 内に新たに取付けられており、一〇台が古い作業場に取り付けられている。織機と並んで糸巻工・撚り糸工が、古い作業場の部屋にみられる。前方の作業場には、勘定所と精製品の倉庫があり、そこから毎日販売が行なわれている。また前・後の建物の屋根裏を含め二階の部屋には、完成された製品や漂白をほどこしたリ・していないより糸・紡糸・原毛等の雑多な原料に溢れている。他の部屋ではリボン艶出工・幅出工・糸巻工・包装工・圧重工・より糸・羊毛選別工・撚合工・練撚工・レース工・リボン工・留金工さらには染色場では染色工が働いている。この大工場―作業場とその横並びに後方の建物には、作業のために完全に使われており、作業に利用されていないところはない」とその自家作業場の活気を報告している。「このシュヴァルツ工場によって生計を立てている労働者 Ouvrier」を整理したのが第三表である。(10)

第 3 表

シュバルツ工場の労働力構成

I 準備工程		5 名
整糸	工	32 名
撚り	工	6 名
撚り	工	7 名
撚り	工	2 名
撚り	工	2 名
撚り	工	3 名
撚り	工	4 名
撚り	工	2 名
II 紡糸工程		165 名
ザルツェ村の紡糸工		
III 製織工程		5 名
親方 Meister		
職人 Gesellen		43 名
IV 仕上工程		6 名
リボン艶出工		5 名
リボン幅出工		3 名
リボン包装工		1 名
リボン圧重工		2 名
漂白工		2 名
染色補助工		3 名
リボン工		3 名
リボン工		8 名
リボン工		24 名
リボン工		6 名
リボン工		2 名
合計		345 名

stedt) には漂白所を設立してその地域の住民 (Knecht, Mägde) をその作業に就労させている。このシュバルツ工場は、先のディンク工場と同じく自家作業場及び問屋制という二つの製造構成部分で全体として一貫した有機的作業を行なっているといえる。従来このような全生産形態は、「マニファクチャと問屋制との絡みあい」ないし生産者類型論では問屋制的生産者として異質な資本下に生産諸工程が支配されていると規定されてきた。しかしディンク工場・シュヴァルツ工場の作業報告書を分析するに際し、問屋制については基本的な検討を必要とするとしても、同一資本下に全作業諸工程が有機的に結合していたことを読みとることができる。

工業調査官ブッゲンハーゲン (Buggenhagen) は、アーヘン Aachen の旅での毛織物工場調査報告書の中で、「工場 Fabrique の外に多くの貧困者が低賃金で働いている。このためすではやくから貧困な少年も働き収入を得ない」

十八世紀ブランデンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造 (浅沼)

ればならなかった。私はこの工場の長所、その最大の利点を少なくとも若干の労働者が自己計算 auf eigene Rechnung で働いていることに認めることができる。この (アーヘン) 大工場主 Fabricant は、羊毛を買い貯えており、自分の羊毛をその品質に応じて選別し、羊毛品種の規定に従い紡糸に選り分け、この紡糸を労働者の能力に応じて分配している。その次に晒しや染色・光沢仕上げの大部分は、自らの監督下に特別な人によって分配されている。すべてこれらの労働の結合によって、多数の人が充分な利益を得ることはできない。(傍点筆者) とその作業実態を報告している。ここには作業場内・外の労働者が有機的に結合され、つまり同一資本下に配列されそれゆえに貧困化している現実を鋭く分析している。

このように同一資本下に作業場内・外の労働者がその資本の指揮下に労働を行っていたという事実認識は、ブラン

デンブルク繊維工業の生産構造を確定・評価していくうえで決定的に重要な意味を持っている。以下この認識に基づきながら①松田智雄氏の提起する一八世紀末から一九世紀初頭にかけての「農・工業の纏れ合い」Verflechtung der Landwirtschaft und Industrie¹³⁾論を検討した後、②ベルリンを中心とする問屋制支配の空間的拡大を跡づけてみたい。

①「農・工業の纏れ合い」論は、問屋制をどのように評価するかという問題と密接に結びついていて考えられる。しかしこの論は、なによりも(i)資本の出廻の曖昧さ、さらには(ii)「纏れ合い」の内実規定なしという二点からそのまま受け入れることはできない。ここで一七九二年二月、リュッケンヴァルデ(Luckenwalde)の毛織物製造業者ヴィンス

ヴィンス工場の年間明細書

第4表

1790年・91年にかけての全織工・親方及びその家族の収入状況

1. 1790年1月から1791年12月末までに全織工に支払った織市賃銀(Weberlohn) 8,655Rthlr
2. 織工の妻や子供は練繰賃銀(Doublierlohn)、糸巻き賃銀(Spuhlerlohn)を得ている。また作業親方 Niedner, Peterman, Rudolph の週賃銀を合計すると 1,862Rthlr
2年間の合計 10,518Rthlr
3. さらに植民者への賃銀支払合計
羊毛梳毛工・紡糸工・練繰工・糸巻き工・羊毛選別工・撚り糸工・仕上り工・材木伐採人・その他 2年間の賃銀合計 4,294Rthlr
2年間の全合計 14,812Rthlr

上記の1790年・1791年の収入明細書にみられる労働者数検討

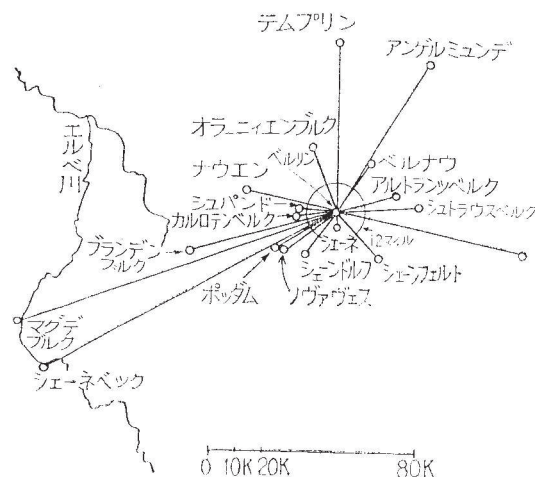
1. 収入分析として
22名の親方織工(Weber Meister)
28名の職人・徒弟(Gesellen u. Lehr Burschen)
50名が50台の織機で作業をしている。
2. 収入分析として
3名の作業親方・光沢仕上げ親方(appretur Meister) 624Rthlr
子供をもつ30名の婦人(Weber Frauen) 1,238Rthlr 6gr 1sh
1,862Rthlr 6gr 1sh
3. 梳毛工・羊毛選別工・撚り糸工・剪毛工・木こり・染色工・光沢仕上げ工
その他、18名(週賃銀 14Rthlr) 2,500Rthlr
・糸巻き工・撚り糸工女、6名(週賃銀 6gr) 420Rthlr
・5名の婦人からなる練繰工と30名の婦人紡糸工 1,374Rthlr 22gr 2sh
4,294Rthlr 22gr 2sh
4. この他に Cönnern, Saltze 村で土地の者による紡糸 4,197Rthlr
2年間の全合計 19,011Rthlr

(Vins) が総監理府に提出した年間「明細書」Specification¹⁴⁾を分析し、この明細書から具体的に「纏れ合い」の実態をほぐしてゆきたい。第四表はヴィンスの「明細書」であり、その経営形態を具体化することは出来ないとしても、ヴィンス資本のもとで労働に従事している労働者の全作業工程にわたる実態を明らかにすることはできる。このヴィンス経営の「明細書」から明らかとなる「農・工業の

纏れ合い」という内実は、(i)ヴィンス資本によりリュッケンヴァルデ内の「小親方」・職人・婦人等を自家作業場ないし問屋制のもとに組み入れながら同時に(ii)周辺農村の農民をもその問屋制支配下に組み入れ、その資本下に全体として一貫した作業を行っていることと評価することができる。この「明細書」分析から明らかとなるヴィンス資本(つまり同一資本)のもとに自家作業場内・外をとわず全作業工程が組織化されているという事実認識は、先にゲイジンク工場等の「労働力構成」検討から得た経営形態分析の成果とまったく一致するものである。以上の実態検討から一八世紀段階での繊維工業の生産構造に占める問屋制度の比重の重要性が明らかとなる。

②ここでベルリン及びその周辺都市に位置するFabriqueの問屋制支配の空間的拡大を明らかにしたい。一七八二年二月八日にヴィントゲンス(Wingens)が工業調査官ブッゲンハーゲンに報告したアーヘンの毛織工業の報告書¹⁵⁾をみると、「.....アーヘンのラシャ職工 Drapier は、経営主 Entrepreneur が自ら羊毛の露立・梳毛・洗毛・紡糸という重要な労働の監督を行っており、自らではなく、その作業のために契約したあちこちの村々に分散して住んでいる in den Dörfern und Ländern zerstreut wohnen 労働者 Ouvrier に作業を行わせている」とし、経営主の問屋制支配の触手が農村の中にくまなく拡大されている実

第5表



情をものがたっている。工業調査官シュミット (Schmidt) は、一七八二年総監理府にベルリンの Fabrique による農民紡糸工の組織実態を報告している。第五表はその支配のひろがりを地図上で確認したもので、ベルリン周辺一二マイルをその主要な問屋制下の生産工程に組織化しながらも、ボンメルンからマゲデブルクに至る広汎な領域が問屋制支配下にあったことが明らかとなる。この地図からは確認できないとしても、このシュミットの報告書は、経営主の農村への問屋制支配のみならず強制労働所・慈善病院・傷痍軍人収容所にたいする問屋制支配をも指摘している。このようにして、いくつかの史料のしめすように農村への広汎な問屋制支配の浸透は、明らかな事実なのである。

プロイセンの統計官吏クルーク (J. Krug) は、農村工業と都市工業の区別を地域的制限や組合の存否・課税の区別によって可能であるとみているが、今やコレレック (R. Kosellek) のいうように「都市と農村の境は、マニエファクチャや Vorleger により乗り越えられた」¹⁹⁾。さらに一七九八年には、ベルリンのファブリック裁判管轄領域が周辺農村にまで拡大した²⁰⁾、という事実は農村への問屋制支配の拡大を裏づけるものである。

この問屋制資本は、農民をその網の目の中に捕えていただけではなく、ツンフトの小親方・植民村・強制労働所

さらには軍隊兵舎にまで支配し編成していった。第六表は問屋制資本の支配下にあったと推定できる強制労働所と、その作業労働の報告である。²¹⁾

また問屋制資本下の「兵舎 Caserne は、工場 Fabrik と同じである。すべての部屋に大きな紡車・梳毛具が置かれている。自由な時間に兵士は、一朝から夜になるまで羊毛を紡ぎ・梳いて」と報告されている。兵士は紡車を「明けの明星」Morgenstern と呼び、兵士家族の貧しい生活は Menschenfabrikation と呼ばれていた²²⁾。この事実は軍隊兵舎の相当規模が問屋制資本下にあったことを意味しているといえる。

ミラボーは、「フレデリック大王治下のプロイセン王国論」の中で、プロイセン全領域にわたるマニエファクチャを検討しており、そこでも広汎な問屋制支配の存在を指摘している。二、三引用してみると「ボメラニには一〇六三台の麻織機がある。自己計算で働らく者は二七五台にすぎず、残りは特定の個人のために働いている。またこの二七五台の内でも大部分は、麻糸の供給を受けており、注文製品のない時には自己計算では働かない」とし、外見上は自営的な麻織工も実質的には問屋制支配下にあったことを指摘できると思う。「一七八三年 (ノイ・マルク) 麻マニエファクチュールは、一七六〇台の麻織機を所有している。

十八世紀ブランデンブルク・プロイセン織維工業の生産構造 (浅沼)

第6表 ブランデンブルク・プロイセンにおける強制労働所

設立期	場所	名称	管 理	住居者数	作 業 内 容
1687	シュパンド	強制労働所	国家→個人	1734: 224名 1783: 227名	紡糸 (羊毛・絹) 紡糸 (羊毛・絹) 染色 (羊毛・絹) 糸の細断
1691 (~1789)	コーク・ニコフ バルク・ナイホ コーク・ニコフ	強制労働所	都 市	150~200名の囚人 1789: 165名	紡糸・製革製造 糸の他
1693	コーク・ニコフ バルク・ナイホ	強制労働所	国 家		紡糸 (羊毛・絹) 糸の他
1702	バルリン	フリードリッヒ 病院・孤児 強制労働所	国家 (Armen Direktorium)	100名の孤児 115名の病人	紡糸 (羊毛・絹) 糸の他
1708	ハレ	強制労働所	都 市		紡糸 (羊毛・絹) 糸の他
1722	ポツダム	軍事孤児院	国 家→ Lagerhaus	1741: 1946名	紡糸 (羊毛・絹) 糸の他
1742	バルリン	強制労働所	都 市	1785: 1250名	紡糸 (羊毛・絹) 糸の他
1747	ヤウエル (シュ ユレゲン)	強制労働所	国 家	1785: 170名	紡糸 (羊毛・絹) 糸の他
1760 (頃)	アン・リッセル	強制労働所	国 家	150名	紡糸 (羊毛・絹) 糸の他

H. Eichler, Zucht- und Arbeitshäuser. S. 140-141

第7表

都市人口	農村人口
1737年 201,481	273,450
1745年 216,769	1746: 273,232
1755年 255,589	330,836
1770年 266,486	360,176
1787年 283,864	402,382
パーセントの割合	
1737年 42.4%	57.6%
1787年 41.4%	58.6%

H. Krüger, a. a. O., S. 31

さらに五台のフランネル・フルーズ製織機、八八台の純麻織布機、二台の混合麻織布機、五五台の靴下・手袋編機、五四台の製帽織機があり、全合計一六九四台となる。この織機には八五三三名の労働者が働いている。……この州の麻工業は、ボメラニと同じ様に成り立っており、織機の一部は彼ら (小生産者) により糸を与え、彼らが製品を現物で返すところの特定の個人のために働いている」 (傍点筆者) とその実情を指摘している。

以上のことから一八世紀ブランデンブルク・プロイセン織維工業の生産構造に占める問屋制の比重は圧倒的なものであった。クールマルクの人口増大を検討すると、手工業の中心地ベルリンを抱えているにもかかわらず、農村人口は都市人口と比較していつも優位を占めている (第七表参照)。しかし、この農村・都市の背後には、問屋制資本の張りめぐらされ、その資本下に一定の生産のリズムが保たれ

てゐるのである。したがって、この問屋制資本下の労働者の支配をどう説明するかが、この課題となる。

註(一) H. Krüger, Zur Geschichte der Manufakturen und

der Manufakturarbeit in Preussen. S. 56, ベーリンの原書過程は、ポーランド・ロシア・タリシヤ地域を

その採取基盤とする中で貫徹してゆく。シヤルジュン産業の中には相当数のポーランド出身の手工業者が、その故郷から暴力的に組み込まれていた。v. Schroeter, „Die Schlesische Wollenindustrie im 18. Jahrhundert,“

Forschungen zur brandenburgischen und preussischen Geschichte. (II) S. 105~106.

(2) H. Rachel, P. Wallich, Berliner Großkaufleute und Kapitalisten. Bd II. S.226

(3) H. Rachel, P. Wallich, a. a. O., S. 227

(4) H. Mottek, Wirtschaftsgeschichte Deutschlands, Bd I. S. 210

(5) H. Krüger, a. a. O., S. 176-177

(6) H. Krüger, a. a. O., S. 177

(7) 十八世紀に一般に使われていたFabrik, Manufaktur, KunstやBeckmannの著書Anleitung zur Technologie S.中「Manufaktur」という名称は大規模な経営を行っている手工業者に与えられ、Fabrikとの差

は、Fabrikが火薬・兵器を用い、Manufakturはもちいない。Kunstと呼ばれる手工業者は、生まれながらの能力と多くの副次的な知識を獲得しており、宝飾・金・銀の加工を行い、ツェンフトには加入していない」と指摘している。K. Beckmann, Anleitung zur Technologie, Göttingen, 3 April. 1780.

(8) H. Krüger, a. a. O., S. 495~497, 附巻 C-2

(9) H. Krüger, a. a. O., S. 502~503, 附巻 C-5 このシュバルツ工場は一七七六年には四万台に、一七九一年には八万台のリボン織機を所有するに至っている。H. Krüger, a. a. O., S. 503, 附巻 C-6

(10) 日雇人・Meß-Hopsterは、仕上工程に入れておく。

(11) 松田智雄氏は、生産者類型論の中でこの「絡み合い」論に相当するものとして資本類型を精緻する中で問屋制的技術者型に場生産者類型を設定されている。松田智雄「ドイツ資本主義の基礎研究」はしがき参照。

(12) H. Krüger, a. a. O., S. 506~507, 附巻 C-7

(13) 松田智雄、前掲書、九〇一、九二頁。

(14) H. Krüger, a. a. O., S. 528~529, 附巻 E-10

(15) 紙枚の間係で詳細な検討を省くが、高橋幸八郎氏により集中マニファクチュアの典型とされている特権マニファクチュアLagerhausもその経営形態は、集中作業場に準備・仕上及び高級製織(ヌベイン織)工程を集中化させ、問屋制下に納糸・製織工程を委託させること

う二つの製造部分からなりたち、全体として二重した生産工程を形づくっている。その問屋制の生産工程には小親方・農民・ブランドンブルク兵士・軍事孤児院等が組み込まれていた。この認識は従来の特権マニファクチュア論に反省を加えるものであるが、本稿では経営形態の指摘に止まる。H. Krüger, a. a. O., S. 511, 附巻 C-9, S. 512~513, 史料 C-10, S. 547~548, 史料 E-9,

C. Hinrichs, „Das Königliche Lagerhaus in Berlin“, Forschungen zur brandenburgischen und preussischen Geschichte. Nr. 44. S. 51

(16) H. Krüger, a. a. O., S.508~509, 史料 C-8

(17) H. Krüger, a. a. O., S. 532, 史料 D-1

(18) L. Krug, Abriß der Staatsökonomie, S. 57

(19) R. Kosellek, Preußen zwischen Reform und Revolution. S. 121~123

(20) R. Kosellek, a. a. O., S. 123

(21) H. Eichler, „Zucht und Arbeitshäuser in den mittleren und östlichen Provinzen Brandenburg-Preussens“, Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte. 1967 Teil I. S. 137.

(22) 兵士が問屋制資本下の生産工程に従事する場合、賜暇制度(Urlaubswesen)を利用してつくのが一般的であり、マニファクチュア労働者に転型している場合において十八世紀ブランドンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造(浅沼)

でも彼らは軍事裁判下にあった。H. Krüger, a. a. O., S. 281~284, H. Hoffmann, „Zur Problem des Übergangs von Feudalismus zum Kapitalismus in Deutschland“, Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte. 1966 Teil IV, S. 271-288.

(23) Mirabeau, De la monarchie prussienne sous Frédéric le Grand, Lantres. 1788. p. 57

(24) Mirabeau, op. cit., p. 66~67

二 問屋制度の再検討

十八世紀の段階でのブランドンブルク繊維工業の生産構造のなかに占める問屋制度は不可欠の、ことばをかえると基本的要素をなしていたことは前述の通りである。この段階での問屋制をどう評価するかといえば、従来の工場生産者類型論に依存する限り、それは商業資本による機能であると規定されているのである。つまり問屋制商業資本家と家内生産者との関係は、「半ば世襲職民制」の「階層制」への編成とこれを通ずる低廉な労働力の支配り経済的な関係によって支えられていると評価される。これがわが国のドイツ史についての一般的な見解である。問屋制商業資本家の機能は、低廉な商品獲得と可能な限りでの高価な販売

にあるから、問屋制商業資本にあっては商人的・投機的性
格が、その企業精神の特徴として活動を規定し、ますます
生産過程から自己を疎外することになるというわけであ
る。そして問屋制的生産者は、このような商業資本の体现
者として規定されているのである。

一八世紀の段階での問屋制度のもっとも問題の根幹とな
るのは、問屋制資本家と直接生産者との生産関係である。
この場合、問屋制度は周知のことく *Verlagssystem* ないし
putting-out system の訳語である。問屋制度という言語の
面からこれを検討する²⁾ *Sanders-Wulffing* は *Verleger*
をみると「商品に必要なもの、ないし商品の製造のための
必要な資本を与える」と解釈され、また *O.E.D.* vol. III の
put out をみると「家屋敷から離れて、あるいは定職につい
ていない者によってなさるべき作業を与える」という意味
である。以上の意味からしても「必要な資本を与える」あ
るいは「作業を与える」とは、結果的には労働力を商品と
して買うことであり、基本的に資本・賃労働関係を表現し
ており、日本語の「問屋」という概念では誤訳になること
をあげておきたい。一七八一年二月、工業調査官ブッゲン
ハーゲン³⁾ はフルフィアース (*Verries*) の毛織工場を報
告しているが、その賃銀支払い箇所をみると、「工場に属
するすべての労働者は、工場のために働き、工場経営主か

工業者はもはや自ら原料や半加工品を購入することはな
く、*Verleger* から原料の加工を委託されている。手工業
者は生産を引き受けたと、その生産に応じて手工業者には
もはや購買価格 (*Kaufpreis*) ではなく、賃銀 (*Lohn*) が
支払われる」と規定している。またクリューガーも「*Ver-*
leger は経済的強制によってその従属下に組み入れられた
手工業者の労働力を購入している」と指摘している。以上
のことからこの段階での工業調査官「報告書」から多数検
出できる出来高賃銀は、「賃賃」と理解しなければならな
いであろう。

ここで重要なのは、問屋制下に展開する生産形態と問屋
制下に支払われている「賃賃」との理解を相関的に捉える
ことが必要である。すでに検討したロシア商業会社やデ
ジック工場は、準備ないし仕上工程を自家作業場で自営し
ており、紡糸から製織工程をその資本下の分散的小生産者
に分配し、かれらに出来高賃銀を支払っている。この場合
作業場外の分散的な小生産者も拡大された同じ屋根の下に
いると考えれば、異質的な労働力が存するのではなく、両
者をつうじて協業に基づく分業が貫徹しているものであり、
それは生産様式としてはマニユファクチャ生産関係を形成
するものであり、自家作業場及び問屋制支配下の全生産は
分散マニユファクチャと定義すべきものである⁴⁾。

十八世紀ブランデンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造 (浅沼)

ら分配された作業と引きかえに一定の賃銀を現金で得て
いる。(傍点筆者)と報告している。これは経営主が作業場
内及び作業場外労働者に作業を分配し、少なくとも全労働
者に「分配された作業と引きかえに」つまり出来高賃銀を
支払っていたという実態を示しているものであり、この事実
からも問屋制資本家と直接生産者との生産関係は資本・賃
労働をなすものと規定できる。またこの点に関して、エン
ゲルスは「商人が小織匠たちに糸を提供し、自分の計算で
固定賃銀を与えて織工に転形させることにより、商人が単
なる買い手からいわゆる問屋 (*Verleger*) となった。」⁵⁾こ
に吾々は資本制的剰余価値形成の最初の発端をみる」と
し、更に「商人を動かして問屋という特別な営業を引き受
けさせたものは、他の人々と同じ販売価格でより大きい利
潤が得られるという見込みである。」問屋は「労働力」ま
だしばらくは自分の生産用具を所有するが、原料はもはや
もっていないかった⁶⁾を買った⁷⁾のであり、「織工の賃銀を
労働時間の一部分が不払いとなる程低下させる。」これに
より問屋は「これまでの商業利潤を超える剰余価値の取得
者となった」と、問屋制資本家と直接生産者との生産関係
を資本・賃労働と規定している。この基本的な理解は、ソ
ビエト・東独での歴史学では一般に承認されているところ
である。モテック (*H. Mottek*) は、「問屋制支配下の「手

理論的にいえば、ロシア商業会社はその自家作業場の設
立を、あくまでも外部からの製品苦情に対処するために染
色工程を集中している。この過程は、経営主の自宅の本来
的機能が自宅を拡大し作業場とするのではなく、むしろ作
業分配・作業コントロールの中心としてあったことを推量
せしめる。このことは、問屋制資本のもとに作業場の有無
にかかわらず分業原則が貫徹しているならば、それを分散
マニユファクチャと規定できる。中心作業場はおそらく
「工場制手工業」であり、その機能は、広汎な地域に分業
原則により編成されている組織性をより有機的に結びつけ
る意味をもち、労働の強度をいっそう増大せしめるもので
あるといえる。

この分散マニユファクチャの概念は、工場生産者類型論
の主要な構成要素としての問屋制的生産者類型を排除す
る。問屋制資本家とその直接的生産者との生産関係は、
「半ば世襲隷民制」の「階層制」への編成 (松田智雄) を
意味するものではなく、本質的に資本・賃労働関係であ
る。

ところで東独の分散マニユファクチャ論は、わが国では
全く誤解して受けとられてきたことはすでに指摘してきた
ところである。この東独の成果がレーニンの『発展』から
その方法的視角を導入してきていることは明らかであり、

『發展』はいうまでもなく一九世紀ロシア手工業の現実について述べたものである。例えば織物業について「營業の先頭にたつていたのは、数十人数百人の賃銀労働者をつかう資本主義的な大仕事場であった。これらの仕事場の経営主は大資本をもち、大規模に原料を買入れ、その一部は自分の企業経営で加工していたが、一部の紡糸や経糸を小生産者にくばり、そしてこれらの小生産者は、自分の家とか小さな機械場で出来高払いを受けて織っていた」とし、この一九世紀段階では、集中作業場を所有する経営形態が支配的であつたとなつてゐる。しかし問題なのは、東独の成果の場合、この一九世紀後半という現実の發展段階を無視し一九世紀に支配的であつた集中作業場を所有する経営形態をそのまま理論的に構成し、これを一八世紀の歴史的現実の中にひきおろし、集中作業場と分散労働を分散マニユファクチャの存立条件としてゐることであらう。この際重要なことは、先に指摘したように問屋制を生産様式としてどのように位置づけるかということである。

問屋制資本家が生産を行う場合、資本の有機結合の弱さ・技術的諸条件・一八世紀の諸戦争による市場の不安定というそのおかれた客観的条件のもとで、分散的小生産者を自己の生産過程に結合せしめてゐるといえる。この場合問屋制が労賃として出来高賃銀を採用してゐることは問

ユファクチャは、それ自体地域による賃銀格差を利用していつてゐるといえる。第八表は工業調査官シュミットの報告によるものであり、ベルリンでの製造経費はアーヘン・フエルファイアーの約二倍を必要としてゐる。その主要な原因は地域による原料価格の差ではなく、賃銀格差から生み出されてゐる。この賃銀格差は、大都市での物価高・農村地域での安価な物価に僅少な土地を所有する農民経済から生まれるといえる。ベルリン・マニユファクチャ経営主は「生産を少なくとも農村や市場町 Landstädtle に分散化する有利性」を説いてゐる。特権マニユファクチャ・ラーゲルハウス Lagerhaus の経営主シュミット (Schmidt) は、「織工をベルリンの外の小都市に、都市在住の紡糸工を農村に移す」ことを提案し、「織工の家を建て、部屋には少なくとも四台の織機を置くことができるようにしなければならぬ。なぜなら、そのことによって協業による利益を維持することができるからである。ここでは家賃もいなければならない。燃料もそれ程必要としない。安い生活費で生活できる。そのため賃銀を相当低くすることができるはずである」と生産の分散化を強調してゐる。生産の分散化の背後には、ベルリン都市内での家賃騰貴のため自家作業場の経営が困難となつてゐたという状況がある。生産の分散化を必要とする客観的状況は、生産過程における作業場の

十八世紀ブランドブルク・プロイセン繊維工業の生産構造 (浅沼)

第 8 表 良質な広幅織布一反についやされる経費

Berlin と Aachen-Vervier-Monjou その他の比較

	Berlin の 労働賃銀			Aachen, Vervier, Monjou 等の労働 賃銀		
	rthlr :	gr :	sh :	rthlr :	gr :	sh :
33 エレないし 34 エレの広 幅織布一反は (製以前に) 約 54 エレの長さをも つ。						
これに必要な経費として	rthlr :	gr :	sh :	rthlr :	gr :	sh :
40 の洗毛	—	10	—	—	5	—
この洗拔きに	—	20	—	—	8	—
この洗立てに	1	—	—	1	—	—
6 の Baum-Oehl に	12	15	6	6	9	—
この 46 の糸巻及び紡糸に	—	2	—	—	3	6
剪毛の	8	10	6	3	12	—
54 エレを織るのに	1	—	—	—	12	—
製部毛するの	5	4	—	15	13	6
圧重の洗拔きに						
合 計	29	19	—	15	13	6

比重を相対的に低下させることとなり、問屋制下に小生産者をその生産工程に結合させる比重がますます重要なものとなつてくる。

またミラボーやアンシクロペデイが集中マニユファクチャに対して分散マニユファクチャの優位を強調するとき、そこには資本の労働力支配の立場が貫かれてゐるとともに、農村内の身分的秩序の安定を強調してゐる。ミラボーは、問屋制資本家にとっての分散労働の有利性を「もしすべての労働者が集中工場で働いてゐるならば、労働者自身と町の中に住んでゐる家族の分をも利益を分配しなければならぬ」とし、分散的小生産への賃銀負担の軽減について述べてゐる。さらにミラボーは「集中マニユファクチャは、一、二の企業家を非常にゆたかにするが、労働者は多少の差はあれ、賃銀をうける日傭労働者にすぎず、企業の利益にはすこしもあずからない。反対に分散マニユファクチャにおいては、何人も金もちにはならないが、多くの労働者は幸福に生活できる。節約家・勤勉家は小資本を蓄積できるだろう。子供の誕生・病氣・自身または家族のために資力をまかなうこともできる。」「集中マニユファクチャで働いてゐる労働者と同じように、分散マニユファクチャの労働者を、経営主からの給料で判断してはならない。ほとんどの者が、彼らの織機以外に、彼

らが耕作する土地すなわち菜園を所有している」と指摘しており、これは貧農層が問屋制下にしがみつくことにより、その生活を安定化せしめている事実を明らかにしているのである。このことは、取りも直さず村落内部での身分制的秩序の安定化が問屋制下に経済的に確保されることを意味している。実際グーツヘルの中には、問屋制資本の農村への進出に対し、紡糸学校を設立しむしろ問屋制資本を積極的に利用している場合がある(三を参照)。

以上問屋制資本家が分散労働をその生産過程に結合してゆく客観的規定条件と分散的小生産者組織の資本の側にとつての有利性をみてきたわけであるが、この理解は、従来比較的搾取関係を軽視してきた「生産力」観点からする作業場「集中化」に対する過大評価に反省を加えるものである。⁽¹⁸⁾

註(一) 松田智雄、前掲書、五八頁。

(二) Sanders Wulfing, Handwörterbuch der Deutschen Sprache, 参照。

(三) H. Krüger, a. a. O., S. 507 史料 C-7

(四) エンゲルス『資本論』第三巻への補足及び補遺「長谷沢『資本論』第三巻二五四～二五七頁。

(五) H. Motek, Wirtschaftsgeschichte Deutschlands, I, S. 208. 松田智雄氏による「工場経営主は作業場

外労働者例えば「親方手工業者にたいして、原料を支給して製品を買いとる問屋制的関係が成立しており、出来高賃仕事として工賃(例えば Weberlohn)を(支払う「筆者」)と指摘されるが、原料を支給して製品を買いとるのは Kaufpreis であり Lohn ではない。しかし原料の支給は、結果的には問屋制資本家の生産過程支配となり、この場合 Weberlohn はすでに工賃ではなく賃銀と理解すべきものと思われる。なお原文では「支払う」が「うけとる」とある。松田智雄、前掲書「はしがき」参照。

(6) H. Krüger, a. a. O., S. 179

(7) 井上幸治「一八世紀におけるノール県の織物工業」井上編『ヨーロッパ近代工業の成立』を参照。

(8) レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」(人月書店)一九一頁。

(9) H. Krüger, a. a. O., S. 176～178. R. Forberger, Die Manufaktur in Sachsen, S. 10～11. 最近のドイツにおける工業問題に関する論文整理「Jupp」H. Blumberg, Manufaktur, Staat und beginnende Industrialisierung in Deutschland, Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte を参照。

(10) H. Krüger, a. a. O., S. 632 史料 D. L. 神学博士 スミルヒ(Sigmich)は「紡糸工の賃銀は、農村や物産の安い地域では低くなっている」と報告している。

H. Krüger, a. a. O., S. 542 史料 H-5.

(11) H. Krüger, a. a. O., S. 312

(12) H. Krüger, a. a. O., S. 347.

(13) 問屋制下に生産工程を広汎な分散的小生産者に委託していくのを容易ならしめる「要素として、当時盛んであった運河の開発を指摘する」ことができた。L. Baer, Die Berliner Industrie in der industriellen Revolution, S. 17～23.

(14) 桑原武夫訳編『百科全書』二四二～二五二頁。

(15) Mirabeau, op. cit., P. 55.

(16) Mirabeau, op. cit., P. 20～21.

(17) Mirabeau, op. cit., P. 53.

(18) 川本和良氏はライエン家のクレファルト絹織物業の「資産表」を検討した際、生産設備費の比率の少なさを前期的商業資本規定の一要素として提起されるが、やはり生産関係の底辺からの資本の性格規定が必要であると思える。川本和良「一八世紀におけるライン繊維工業の展開と『営業の自由』の前提条件」『立命館経済学』九ノ五。

三 問屋制資本家による労働力の組織形態

問屋制資本家の社会的系譜をみると、一般に商人とツン十八世紀ブランドンブルク・プロイセン繊維工業の生産構造(浅沼)

第9表 ゴールトヴェルク織物組合内の親方分解

全親方数 421 名のうち
251 名—独立親方
53 名—Lohnntlicher、つまり Verleger のために働いている。
101 名—他の親方のもとで職人として働いている。
6 名—未亡人であり、手工業を営んでいる。

フトの富裕親方が検出できる。⁽¹⁾特に問屋制資本家となっていく富裕親方は、一八世紀中に現出する親方分解の過程の中で資本蓄積を行ってきた。一七八九年シュレジェンのゴールトヴェルク(Goldberg)織物組合での親方分解の例をみると第九表のごとくであり、親方以外に三二名の職人と五五名の徒弟がいくつかの作業場で実質的な賃銀労働者として働いていると報告されている。⁽²⁾このゴールトヴェルクでの親方分解の実態を明らかにしたシロエター(V. Schroeter)は、「没落親方を賃銀労働者(Lohnmeister)と規定し、またハレの親方分解を実証的に検討したノイス(E. Neus)は、ツンフト親方の資本家的親方を問屋制親方(Verlegermeister)・従属的な小親方手工業者を verleger Meister と規定し、Verlegermeister による広汎な問屋制支配を強調している。⁽³⁾この親方分解はブランドンブルク・プロイセン全領域にわたって現われていると考えることができ、先のデイジ

十八世紀 フランス ジャンブルク	No.	一般労働者が6日間 に及ぶ反織	ツンフト緑 飾り工の反 当り賃銀		ツンフト緑 飾り工の週 賃銀		非ツンフト リボン製造 工の日賃銀		非ツンフト 労働者の週 賃銀		婦人・子供 の日賃銀		婦人・子供 の週賃銀		
		反	gr	sh	rh	gr	sh	gr	sh	rh	gr	sh	rh	gr	sh
1	8	3	9	1	6	—	3	—	1	—	—	2	3	—	18
2	8	5	—	1	16	—	4	—	1	8	—	3	—	1	—
4	7	6	—	1	18	—	5	—	1	11	—	3	9	1	2
5	7	7	—	2	1	—	5	6	1	14	6	4	—	1	4
6	7	8	—	2	8	—	6	—	1	18	—	4	6	1	7

問題をみてゐる。マニファクチャの基盤は、あくまでも手工業的技術であることはいうまでもなく、また間屋制支配は労賃として出来高賃銀の形態をとるという二つの規定的条件は、間屋制資本下の労働力の組織形態にとって決定的な意味をもつ。つまりそこにはどうしても(i)熟練労働の必要性、並びに(ii)技術伝達機関存在の必要性が生まれ、徒弟制がマニユファクチャの自然の同伴者となつてくる(レーニン)。第一〇表は絹リボンを製造しているベルリンのウェブレア・ウント・イゼン織維工業の生産構造

ファルクケン工場 (Farreau & Falckmann Fabrik) の賃銀表であり、ここにはファブレア資本下に小親方・職人からなるツンフト労働者や一般都市民・農民さらには婦人・子供を中心とする非ツンフト労働者が組織化されていることが明らかにされている。¹⁰⁾ この賃銀表は婦人・子供の低賃銀を梃子とし、都市内外の小生産者を生産工程に従属させてツンフト・非ツンフト労働者間に一定の賃銀格差を生み出していることを示している。これは一八世紀段階での熟練労働に基づいたツンフト労働者が非ツンフト労働者に対してもつ労働価値上の優位性を示したものであるが、その部分化された単純作業のゆえにその価値は相対的に低下していることは明らかである。

11) でマグデブルクのリボン製造主バッハマン (Bachmann) によりマグデブルク議会及び縁飾り組合に提出された「要請書」を分析し、問屋制資本下の労働過程に果たした親方・職人関係を明らかにしたい。

一七五五年二月二十四日、マグデブルク議会へのバッハマン「要請書」の第七項は「我々により雇われる親方・職人・徒弟のすべての採用は、縁飾り組合のツンフト(的秩序)に従って行なう」とある。¹¹⁾

一七五五年六月二十五日、縁飾り組合 Posamentiergewerk へのバッハマンの提案はつぎのように述べている。我々はは

屋制度が支配をひろげ、労働賃銀が一部不払になる程の低賃銀は商人の剰余価値を増大させる。ここに商人と問屋制資本家は、従来の商業資本をこえる剰余価値の取得者となるとともに、一方では商業からの譲渡利潤を市場関係を握ることにより決して放棄してはいない。テンニエスは「工場主となった親方は、工場生産に従事する商人におとらず本質的に資本家であるか、あるいは財産を有する抽象的人格である。」「したがって彼は、いわばこのような自己の正体を見かけ上親方であるということによって後天的に蔽いかくしている」と、問屋制資本家を被っている旧来的な法的身分的殻を指摘する。この表層の内実は、すでに問屋制資本家としてその生産過程及び流通機構から利潤を追求しているのである。つまり産業資本と商業資本が一人格内にからみあつて存在しているといふことができる。

以下では、こうした問屋制資本家が(1)ツンフト親方・職人及び(2)農民をその資本指揮下の生産過程に結合させる場合、伝統的な親方・徒弟関係グーツヘル・隸民(Untertan)という家父長制的諸関係が如何なる役割を果たしていったか明らかにしたい。なおそこに現出する直接生産者の存在形態は、フオーゲルフライな近代的プロレタリアートのイメージを基本的に排除する。

(1)まず問屋制資本家によるツンフト親方・職人の組織化

「二、三の縁飾り親方とリボン工場に一定数の職人を紹介することを約束している。当市の縁飾り組合からこちらに來なければならぬ大部分は、至る所で困難に陥っているのがみられる。組合員の財産報告届をみると全組合員が負債をかかえていることは明らかであり、それ故組合に對し若干の提案をするのは理にかなっていると思われる。」我々は「有能な親方を捜しだすことを必要としている。我々は都市に必要な設備を設け、人々に利益を与えようと思う。」そこで当市の縁飾り組合の「親方と職人を採用し、職を与えようと思う」。

以下親方・職人関係に連関する項目をあげると、第三項は「すべての親方は、二人ないしそれ以上の職人の監督を行い、さらに三人の職人につき一人の徒弟を教育すること」を挙げており、第一項では「職人について、職人にはリボン一反につき正当な賃金を支払う。つまりリボン一反につき一二グロッシェを支払う。これは従来親方に一四グロッシェを支払い、親方はこれから三グロッシェを自分のもとにおき、職人に一二グロッシェを渡している。この提案では職人は従来より一グロッシェ余分に獲得できる」と提案している。また一三項では「職人は親方のもとでとちがい、自炊を行い、工場の外の都市に休息場を求めなければならぬ。そのための住居費として週に二グロッシェ支

払う」とし第一四項で「徒弟の世話に関しては、その食・住の世話には工場が引き受ける」と工場側の姿勢を明らかにしている。

以上のバツハマン提案を整理すると、この縁飾り組合はこの提案以前からバツハマンの資本下に組み込まれていたことが推察できる。

①まずバツハマンは、その生産過程の中にツンフト親方・職人・徒弟というツンフト的な生産秩序を活用しようとしている。このことのもつ意味は重大であり、第三項にみられるごとく資本の側からすれば、家父長制的徒弟制度は技術伝達のあるだけでなく、生産の管理という意味を持つていた。このことは親方が実質的にマニユファクチャ労働者に没落しても、なおその人的・身分的秩序に基づく一定の組織的な管理機能を所有していたことを意味する。

②第一項にみられるように、親方職人が問屋制資本下に組織化される場合、旧来的な親方・職人という徒弟関係にみられる二重構造は、親方労働者による職人労働者の搾取基盤に転化している。一八世紀という段階規定を考慮に入れるとしても「資本による労働の搾取が、出来高賃銀の場合には、労働者による労働の搾取を媒介として実現される(マルクス)¹³⁾ないし「徒弟制度がマニユファクチャの自然の同伴者となる。周知のように、商品経済と資本主義との一般的な環境のもとでは、この現象は最悪の形と人格的

隷属と搾取にみちびく」(レーニン)¹⁴⁾といわれる。一七六一年にベルリンの毛織仕上職人は、その親方に対しより高い時間賃銀を要求し反乱を起こしているが、以上の意味からこれは中世的な職人反乱とその性格を自ずから異にしているといえる。

③第一項にさらに係わるが、バツハマン経営主はその資本賃労働関係において徒弟制度のもつ技術伝達・生産管理という機能を残し利用しながらも、個別親方・個別職人という契約関係を生みだそうとしている。この資本の側の論理には、生産に従事する全員がそれぞれの能力に應じて契約の当事者となるという資本の搾取をより有効・確実なものにしようとする意図が窺える。

第四一三・一四項を見ると、工場経営主自らが従来の徒弟関係を改編しようとし、職人を親方から引きはなし徒弟を自らの監督下におこうとしている。問屋制資本下の生産工程に果たした徒弟関係の役割はまた労働力確保という機能をもち、資本の論理に従っての徒弟関係の再編は、労働力の資本のもとでの再教育つまり生産過程の編成強化を意味しているといえる。

当然ながら以上のような問屋制資本の進出に對し、一七五五年七月二日、バツハマン提案に對する縁飾り組合の「反論」があらわれている。ここでは伝統的な親方・職人

十八世紀ツンフト・ブルク・プロイセン織維工業の生産構造(浅沼)

関係を問屋制下においても固定化させ、ツンフトの賃銀問題に對する自己決定権が強調されている。¹⁵⁾反論の第一三・一四項で「工場が設立されなければ、人々は充分な収入を得ることができない。工場は我々の特権を破壊し、我々をまったく新しい形態の中に組み入れようとし、我々を常に監督しようとしている」と問屋制資本家に對する批判を展開する。この実態はテンニエスのいう「自立的手工業が貧乏で弱ければ弱い程、外部から入りこんでくる商人にとつてますます都合がよい」という指摘と一致し、これが一八世紀段階で問屋制資本下の生産過程に結合されていった親方・職人の実情である。

(2) 問屋制資本家による農村労働力の組織化について。ここでは先のディンク工場やシュヴァルト工場の生産工程に検出できた Gesinde, Knecht, Mägde を分析することからはじめたい。一般に領主経営で犁耕・飼畜を担うのは僕婢 Gesinde であり、なかでも犁耕・運搬などを担うのは下婢 Knecht である。「一八世紀中期以後の「僕婢規制令」や「僕婢奉公強制」は、これら Gesinde, Knecht 等に對する領主経営の直営地労働力の「拘置」体制強化を目的として出されているといわれる。概括的な事実しか把握できないとしても、このような「拘置」体制の背後には、急速な人口増大により相対的に貧農層が増大している

第11表 クールマルク非特権地帯 (Platten Lande) の状態

地区名	30年戦争以前					1746年					合計村 マイナス	引き計 マイナス
	村落数	農漁民	小住み農	手織業者	合計	村落数	農漁民	小住み農	手織業者	合計		
1. Altmark	496	3,757	3,892	313	71,962	524	3,817	4,586	2,638	11,041	28	3079
2. Teltow	134	1,119	649	261	2,059	140	986	505	972	2,463	6	404
3. Oberbarnim	88	1,064	535	126	1,725	89	827	406	1,152	2,385	1	660
4. Niederbarnim	80	920	682	231	1,834	89	728	552	1,124	2,404	9	569
5. Zauche	102	923	645	313	1,882	102	897	655	617	2,169	—	287
6. Roppin	88	1,414	569	75	2,057	95	1,310	383	546	2,239	7	182

O. Behre, Geschichte des Statistik in Brandenburg-Preußen. S. 179

(第一一表参照)。特にその中でも家持日雇・紡糸工の加速度的な増大は注目される。⁽¹⁹⁾ コゼレックは一七四六年のクールマルク非特権地帯での日雇・インストロイテ層を一三、三〇〇名とし、一八〇四年には二〇、五三三名とその増大を明らかにしている。⁽²⁰⁾ なお Knecht, Mägde は非特権地帯のみならずクールマルク諸都市にも検出でき、一七二八年の「隷民報告書」には Gesinde という名称のものに Knecht 四、〇六九名、Mägde 二、九六二名が報告されていることは注意を要とする。⁽²¹⁾

以上の貧農層の増大確認とともに、問屋制資本下の生産過程に検出される Gesinde, Knecht 等を相関的に検討すれば、相当数の Gesinde らは賦役労働から解放されている日や農閑期に問屋制資本家の紡糸・梳毛等の生産工程に参加し、その最低生活を確保していたことは明らかである。一七六六年九月一日、ホーヘンブッシュ (Hohenbusch) 並びにトロッケンベルフ (Trochenwerth) 出身の植民者は、王に「全生活を羊毛の作業や紡糸・織布で賄っている」とし、収穫期一五日間にわたる賦役労働廃止を要求している。⁽²²⁾ 一七六七年七月二十四日、ラーゲルハウスの問屋制下にあったアムテ・ヴォルツプ内七つの紡糸村で一揆が勃発しており、その「陳情書」を検討すると、管轄区域で「一五日間の収穫期の内五日間は鎌を持ち、一日間は熊手をもつ

手耕賦役を行わなければならない」ことに反対しての一揆であった。⁽²³⁾ この植民者の戦いは、非特権地帯での封建的諸関係に起因するかにみえるが、植民者の収入の基本的部分がすでに問屋制下での労働賃銀にあったことに注目すべきであろう。

先の Gesinde なり Knecht は、法的には確かに僕婢なり下僕という隷属的人格であるが、また問屋制下の紡糸・梳毛工程に従事するマニユファクチャ労働者でもあった。こゝには Lohnknecht に表現されるように、一人の人格の中に Doppelstellung としつゝのいくつかの経済的人格が体现されている。農民分解の「下方」に位置する Tagelöhner, Losleute, Gesinde 等を藤瀬浩三氏は「半プロ概念」で一括され、また松田智雄氏は「農・工業の連れ合い」論の中で「労働者農民」を設定されるが、これら貧農の社会的存在形態からみるならば、マニユファクチャ労働者と規定できる。エンゲルスが「マニユファクチャ労働者は、ほとんどどこでもまだ生産用具を自分の所有物としてもっていた。すなわち自分のつかう織機や家族のつかう紡ぎ車、ひまひまに自分で排す小さい畑をもっていた。」「マニユファクチャ労働者は、ほとんどいつでも、いなかで、そして自分の地主または雇主と多かれすくなかれ家長制的関係のうちで生活している」という時、これは紛れもなく問屋制下の

Gesinde や Knecht を表現したものであるといえる。

以上の認識に基づき、ここでは問屋制資本家とグーツヘルとの構造的連関、さらには問屋制下の生産機構に占める村長 Dorfschulz の役割を明らかにしてゆきたい。問屋制資本下の生産過程に分散的家内労働者を結合させていく場合、その生産工程の農村労働力への依存度がおおきい程、生産は農村の季節的な生活リズムに規定されることとなる。農閑期の農民の潜在的な労働力の増大は、賃銀低下を引き起こす程であるが、収穫期には紡糸工の不足を生み出す。ラーゲルハウスの経営主シュミットは紡糸労働者の不足が原因で、「織工は昨年の夏数日間休業しなければならなかった」と、紡糸工程の労働力不足が全生産過程に及ぼす影響を明らかにしている。⁽²⁴⁾ この紡糸労働者の不足は、問屋制資本家どうしによる紡糸工獲得競争を引き起こし、一ヶ村内に紛争の一手手前の状況さえ生み出していた。ラーゲルハウスのシュミットはブッコウ (Buckow) から他の問屋制資本家を排除する目的で一七九四年に土地所有者であるフレムミンク (Junker von Flemming) と契約を結び、その地域での農民紡糸工を独占的にその資本下に結合させようとした。パウエル (Paul) 並びにコルネリウス・ヘッゼ (Cornelius Hesse) マニユファクチャ関係者は、この事態を王に直接陳情し、ラーゲルハウスによる農民紡糸工の

独自の組織化阻止を願ひ出ている。「我々の工場経営主はすでに二〇年このかたブッコウで梳毛の紡糸を行つており、今日まで絶えることなく続けてきている。ブッコウの都市や農村の住民は、紡糸を行うことにより相当の収入を得ている。」しかし最近ブッコウの土地所有者フレムミンクは、突然都市や周辺農村の住民や市民に対し、ただラীগエルハウスのためにのみ紡ぐことを強要させようとしており、ラীগエルハウス以外すべての工場をここから排除しようとしている」とフレムミンクとラীগエルハウスの結合を明らかにしている。この「陳情書」に対しフレムミンクは、ブッコウ市参事会や村落裁判所で「謀民」Untertanは喜んで私に賛成しているとし、ラীগエルハウスの契約を実行に移している。以上の過程には、問屋制資本家とグーツヘルとの間に農民紡糸工をめぐる何らかの利害の一致点があったことを推察できる。

問屋制資本家とその生産工程を農村に拡大する場合、村長の生産過程に占める役割は重要である。一七八一年ラীগエルハウス内で良質な織布生産の拡大計算が立案されその席には工業調査官も出席し、経営主シュミットとの間で作業場に供給する紡糸に関する討論が行なわれた。その際アムテ・ウオルツプの六ヶ村に一人の紡糸代理人Spinnfaktorを設置することを決め、フリードリッヒスハーゲン(Friedrichshagen)の村長を経営主と分散的な農村家内労働者との仲介人とした。その計画に従うと、六つの大きな部屋をもつ家敷を設立し、その中の二つを代理人(村長)の住居とする。残りの部屋は、原毛・梳毛を保存し、さらにはより糸を置くことと定められている。ここに村長はラীগエルハウスの生産工程に参加し、中間問屋 Zwischenverlegerとしてアムテ・ウオルツプ六ヶ村を問屋制支配網に組み入れる役割を果たしていくこととなった。興味あることに村長は「代理人」となる際いくつかの条件を示し採用されている。村長はすでに村民に「塩とタバコの販売」を行っており、代理人採用に際し、食料品取り引きの許可、さらには紡糸工に販売する生活必需品取り扱いの許可を申請し、さらに作業場への紡糸運搬用の馬六頭を飼育する土地四〇、六〇モルゲンを要求した。村長はラীগエルハウスの生産工程に参加しながら、その紡糸工程で作業する農民を生活必需品販売を通じて搾取しようとするものであり、ここに農民はグーツヘル・問屋制資本家・中間問屋によりその生活を困窮化せしめられることとなる。

グーツヘルの中にはフレムミンクのように一定の問屋制資本家と手を結んでいく他に、むしろ積極的に問屋制進出を推し進める者も出現してきた。シェニンヒ(Landrat Freiherr von Schoening)やシンディクス・ダーメス(Syndicus Dames)は、村民の紡糸を行う有利さを認め、年少

者のための紡糸学校 Spinnschule を設立し、問屋制資本家の要求に応じている。またグーツヘルにはフリードリッヒ二世の植民村設立計画に参加するものも出現し、グーツヘル領内に有能な外国人紡糸工を定住させようとしている。⁽³¹⁾ 以上の事実認識は、ブロイセン原審過程を検討する際、問屋制的工場生産者にみられる無媒介的な小生産者搾取論が無意味であることを提起するとともに、グーツヘルが新たな生産力の芽を逆用してゆこうとする姿勢のあることを明らかにしている。また一定段階まで問屋制資本の農村進出が、かえって貧農層を搾取しながらも、貸銀支払いという現金収入によって一定の生活を保証しているという現実には、農村の身分的秩序の安定化に一役かっていた面のあることを示している。ここに問屋制資本家とグーツヘルとの間に農民紡糸工獲得についての利害の一致をみる事ができる。

註(1) H. Rachel, P. Wallich a. a. O., S. 255

(2) v. Schroetter a. a. O., S. 110. H. Krüger, a. a. O., S. 172.

(3) v. Schroetter a. a. O., S. 110.

(4) E. NEUSS, Entstehung und Entwicklung der Klasse der Besitzlosen Lohnarbeiter in Halle, S. 168, 177~178.

(5) テンニエス、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼル十八世紀ブランデンブルク・ブロイセン繊維工業の生産構造(浅沼)

ルンシャフト』(1)一三五~一三六頁。

(6) W・ウエーバー『一般社会経済史要論』(上)二九〇~二九二頁。

(7) H. Rachel, Das Berliner Wirtschaftsleben im zeitlichen Alter des Frühkapitalismus, S. 166.

(8) H. Rachel, a. a. O., S. 167.

(9) テンニエス、前掲書一三六~一三七頁。

(10) K. Hinze, Die Arbeiterfrage zu Beginn des modernen Kapitalismus in Brandenburg, Preußen S. 139.

(11) H. Krüger, a. a. O., S. 129.

(12) H. Krüger, a. a. O., S. 463~464 史稿 A-1.

(13) マルクス、長谷訳『資本論』第一巻七一九頁。

(14) レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』(2)(大月書店)二四九~二五〇頁。

(15) H. Krüger, a. a. O., S. 309.

(16) H. Krüger, a. a. O., S. 465~468 史稿 A-2.

(17) テンニエス、前掲書一三六~一三七頁。

(18) 藤瀬浩司『近代ドイツ農業の形成』一四五~一四六頁

(19) O. Behre, Geschichte der Statistik in Brandenburg-Preußen bis zur Gründung des königl. Statistischen Bureaus, S. 179.

(20) R. Kosellek, a. a. O., S. 133.

(21) O. Behre, a. a. O., S. 172.

- (22) H. Krüger, a. a. O., S. 632. 史料 G-1.
- (23) H. Krüger, a. a. O., S. 632-633. 史料 G-2.
- (24) 藤瀬浩司, 前掲書一四五頁。
- (25) 松田智雄, 前掲書一八九〜一九〇頁。
- (26) エンゲルス『共產主義の原理』(大月書店) 八二〜八三頁。
- (27) H. Krüger, a. a. O., S. 203.
- (28) H. Krüger, a. a. O., S. 491. 史料 B-5.
- (29) H. Krüger, a. a. O., S. 203.
- (30) H. Krüger, a. a. O., S. 205.
- (31) H. Krüger, a. a. O., S. 203. 農民の大部分は賦役労働後、「領主権により資本主義的経営主のための労働を強要された」。K. Hünze, a. a. O., S. 149.
- (32) H. Krüger, a. a. O., S. 137.

むすび

一八世紀ブランデンブルク・プロイセンの繊維工業の生産形態及びその生産過程に果たした家父長制的諸関係の役割を検討してきた。ここではその結果を若干の問題提起を含め整理したい。

①この段階での繊維工業の生産過程は、資本の有機的結合の弱さ・市場関係の不安定・地域による賃銀落差という

客観的条件の中で作業場を設立する固定資本を節約し、問屋制下に生産諸工程を委託するという比重が大きかった。問屋制資本家と直接生産者との生産関係は、資本・賃労働である。一般に Fabrique といわれるものの生産形態は、自家作業場に準備・仕上工程を集中化し、紡糸・製織作業工程を問屋制下の生産に結合させるといふ二つの製造部分からなりたっており、全体として作業場内・外の諸工程を通じて有機的に分業原則を貫徹している分散マニユファクチャであるといえる。この認識は従来 Fabrik ないし Fabrikant を「工場」や「工場生産者」(松田智雄)と理解することに反省を加えるものである。

②一八世紀前半期に現出する親方分解は Verlegermeister や Lohmeister を生み出す土壌であった。問屋制資本下に小親方が組み込まれる場合、旧来の親方・職人という家父長制的関係は、その生産工程において技術伝達機関・生産管理・労働力確保という役割を果たすだけでなく、親方労働者による職人労働者の搾取基盤に変質している。問屋制資本家となった富裕親方は、商人ギルドに参加することにより、その特権を利用し、流通過程を支配することにより資本蓄積の機会を増大させ、その一方ではツシフトをそのマニユファクチャ資本の機能に適合化せしめている。

③問屋制資本の生産工程に結合せしめられた農村の分散

的な家内労働者は、いまだグーツヘル直営地への一定期間の賦役労働を課せられていた農民であった。その多くは貧困化し、農閑期に問屋制の生産過程に参加することによりその生計を支えることができた。この小生産者は法的には隷民であるが、事実上の賃銀労働者であるという Doppelstellung の意味でマニユファクチャ労働者であった。マニユファクチャ労働者の多くは農村共同体・手工業共同体の構成員であり、その意識は手工業技術にもとづいた熟練意識と共同体に規定された権利意識をもつといえる。

以上の結論は、旧来の工場生産者類型論全体に対し立言できると思わないが、類型論の重要な構成要素としてある東エルベ地域の問屋制的生産者類型として設定されてきた事実認識に対し反省を加えるものである。この反省は、資本類型論をその概念装置の要として構成されているドイツ資本主義構造論再検討の一つの手掛かりを与えるものといえる。

(立教大学博士課程在学)

(有) 三 信 印 刷 所

横浜市南区前里町2-44
電話 045 231 8162〜3